

中国山地をフィールドとした田植歌研究

田中 瑩一

田植歌を歌いながら田を植えることが行われなくなつて久しい。今日ではわずかに神事や芸能等の中に伝えられたものを聞くことができるだけになつてしまつた。

一九五〇年代の後半から七〇年代の前半にかけて、仕事田の田植歌伝承の最終期、中国山地をフィールドとした田植歌研究が盛んに行われた。その成果の一端として今日までに相当量の「田植本」が発掘され蓄積されて来ている。それらの中には作業用の心覚えとして筆録されたと思われれるものもあれば、実用を離れて保存ないし鑑賞のために筆録されたと思われるものもある。これらを口承文芸研究の資料としてどのように把握するか、方法的な考察は未成熟のままである。

「本来、歌が歌謡として書物に書かれるときは、書いた人の頭のなかに歌が響いているはず」(飯島彦氏)、「宋安小歌集」見、「国文学研究資料館『歌謡』所収、二〇〇〇年)で、そのいちいちの響きを聞き取ることが歌謡の書き留めから口承の文芸を読み取る営みとして見直されなければならないだろう。

かつて友久武文氏は田植歌研究の展開を振り返つて「民俗学的な調査研究と国文学的研究とが」「必ずしも十分には相交わらなかつた」時期のあつたことを指摘された(『伝承文学研究』二二三

号、一九七九年)。我々の前に積まれている「田植本」は稲作儀礼や田の神信仰の心意を解明する上で有力な情報を提供してくれていることも確かだし、文芸的達成度の高い「田植草紙」の解釈や鑑賞に根拠を示してくれていることも確かだが、その見方にとどまつている限り、個々の「田植本」筆録者の「頭の中」の「歌(文芸)」を十分聞きとることはできない。

一例を挙げよう。私が近年校注を試みた『新宅屋本「歌乃雙紙」(拙著『口承文芸の表現研究—昔話と田植歌—』和泉書院刊所収、伝承地・島根県邑智郡邑南町中野、文化一四年書写)は「田植草紙」と共通するところも多いが、一方、個々の詞章についてもまた歌の配列や集成の姿においても「田植草紙」とは一味違つた特質を持つており、しかもそれが一定の地域において共有されていたことが明らかである。またこの本の跋文には「世に流布することまれ」な親本から書写した旨が記されていて、実用とは別の価値観で筆録されたことが推測される。このようなことを勘案してみると、この本を「田植草紙」を主峰とする中国山地田植歌群の裾野に位置づけるだけではその本質はとらえられないだろう。この本の個性をとらえたいのでそこに収められた歌の響きを聞きとることにつとめなければならない。同じような事情はほかの「田植本」についても言えるはずで、「田植本」は群としての考察の他に、個としての解明を待っているにちがいないのである。

(たなか・えいいち／島根大学名誉教授)